

被災者の体験を聞く（阪神・淡路大震災）

震災の日、私は消防署に残っていた1本のノコギリを持って現場に飛び出しました。そこはとてつもなく大きな火災現場でした。瓦礫に足をはさまれた人と遭遇し、その人から「そのノコギリではさまれている足を切ってほしい。」と懇願されました。火はすぐ近くまで迫っており、彼の希望する意味をすぐに理解できましたが、足を切れませんでした。次に見にきたときには、焼け死んでおられました。私は、あのとき、足を切るべきだったのでしょうか。

（出典）消防隊員が見た阪神・淡路大震災（財団法人神戸市防災安全公社。2010年2月現在、みるめ書房に移管）

力及ばず…それでも胸が熱くなった現場エピソード

救出活動をするなかで、2階建てアパートの下敷きになっていた20歳くらいの女性を助けてあげられないことがありました。かわいそうでしたが、消防職員と消防団が力を合わせても、人間の力ではどうにもならないこともあるんですね。何とも言葉に表せない思いでいたとき、彼女のお父さんが「消防さんはよくやってくれた、ありがとう。一生懸命助けてくれた、それでも助からなかった…消防さんは悪くない」と感謝の言葉を述べられました。取り乱すことなくそういう言葉を発せられ、なんと立派なお父さんだろうと思ったのと同時に、ホロリと涙がこぼれました。

（出典）人と防災未来センターホームページ「震災を語る（第26回）」から抜粋

自宅は倒壊、ただ運良く怪我一つなし

地震のあった当時、私は神戸市灘区で妻と2人、長屋のような2階建て木造住宅に住んでいました。5時頃に起床する習慣があったので、地震のときは起きていました。そこで、8～10秒くらいで自宅が倒壊してしまうのを見たのです。屋根は南にずれて崩れるような形で倒壊、私自身、土壁に遮られて身動きができなくなりました。ですが、私と妻はその北側の1階におり、2人とも不思議と怪我もなく無事だったのです。そこから、土壁の間から何とか這い上がるのに、4、50分かかりました。脱出したときはパジャマと裸足の姿。近所の人から靴をもらい、すぐさま手作業で近くのアパートにいる住民の救助にかかりました。救助した3世帯は、一人暮らしの女性に、2組の夫婦。この夫婦は、残念ながらどちらも奥さんが亡くなっていたのです。

（出典）人と防災未来センターホームページ「震災を語る（第2回）」から抜粋

忘れることのできない、伝えておきたい避難所でのエピソード

全身打撲やショックが残っており、私が体育館で横になっていた時のことです。隣には視覚障害のご夫婦と小学生の姉弟が身を寄せていました。ある日、姉弟の目の前で父親がバツバツと倒れ、そのまま運ばれて行ってしまいました。まだ幼い子どもたちの姿と父親の容態を慮っていた翌日、父親の兄弟だという男性と子どもたちが戻ってきました。父親は亡くなられたとのことでした。荷物をまとめて避難所を立ち去ろうとしたその時、姉弟は手にしていた牛乳パックを「残っている人に置いていてあげよう」「早く飲むようにと書いておこう」などと相談をはじめたのです。大震災に見舞われ、衝撃的に父親を亡くし、悲しみがはち切れんばかりであるはずなのに、なんて思いやりのある姉弟だろうかとは私はいたく感動していました。しばらくして、学校の先生らしき女性が姿をあらわすと、これまで気丈に振る舞っていた子どもたちがその女性の胸に顔を埋めてワッと泣き出したのです。私はさっきまでの感動に大きな悲しみが重なって、言葉にはできない思いにかられました。この光景は、決して忘れることができず、いまでもこの姉弟の将来に幸あれと祈り続けています。

（出典）人と防災未来センターホームページ「震災を語る（第5回）」から抜粋

※URLは、<http://www.dri.ne.jp/shiryo/katari.html>

被災者の体験を聞く（阪神・淡路大震災）

家具をすべて固定していたことが、家族の命を守りました

私たち家族が、幸運にも全員無事だった理由を思い起こしてみると、「ローチェスト(3段のタンス)のうえに家の梁が落ちてきて、生存可能な空間ができたこと」、「日頃から家具をすべて鴨居に金属で固定していたために、家具の転倒がなかったこと」この2つが大きかったと思います。私は神戸で暮らす以前に地震が頻発する東京に住んでいたため、「家具を固定する」という習慣がありました。

このたびの大地震では、家そのものが命を奪う凶器となってしまうことを痛感しましたね。私の住んでいた神戸市東灘区では1,471人の方が亡くなられたのですが、そのほとんどが倒壊した家屋もしくは家具の下敷きになってしまったのです。その後に再建したわが家では、こうした教訓を活かして大地震に襲われても生き延びることができるよう、設計に工夫を凝らしています。

（出典）人と防災未来センターホームページ「震災を語る（第34回）」から抜粋

炊き出しのリーダー

避難生活をしているあいだ、私は炊き出しのリーダー格として火の番をしていました。はじめは自分と家族のために夢中でとった行動が、自然と人のためにもなっていたんです。被災した人々はみな疲れ果てていて、なかなか自分で何かをしようとしなかったんですね。ただ途方に暮れ、誰かが何かをしてくれるのを待っていました。でも、人に助けをいただくことと甘えることは違うんですよね。自分にできることは、自分でやっていかなければダメ。そのことに気づいてからは、ひたすら貫き通してきました。

（出典）人と防災未来センターホームページ「震災を語る（第5回）」から抜粋

徒歩5分の病院、小学校まで25分もかかる

亡くなった方のご遺体やケガ人を運ぶため、避難所と病院へ向かうのですが、倒壊した家、倒れた電柱の間を歩くには、とても時間がかかるのです。徒歩5分の道のりに25～30分もかかってしまいました。すべての作業を終えるのに夕方までかかってしまったのです。

そしてこの日から小学校での避難所生活が始まります。体育館で寝泊まりをしていたのですが、しばらくして授業を体育館で行うため、各教室へ移ることになりました。私は、4年1組。せまい教室に7人が寝泊まりする生活が続きます。もちろん、当時は会社員でしたので、会社へも小学校から通っていました。

（出典）人と防災未来センターホームページ「震災を語る（第2回）」から抜粋

※URLは、<http://www.dri.ne.jp/shiryo/katari.html>

被災者の体験を聞く（阪神・淡路大震災）

譲り合い、助け合い…他人が身内のように感じられました

倒壊を免れた近所の方の家で休ませていただいたあと、近くの小学校の体育館で避難所生活をはじめました。外に出て最初の驚きは、見慣れた街並みが一変していたこと。近所の古い木造住宅は全滅、塀は道路に崩れ落ちてはるか向こうまで街が見渡せ、被害のひどさを物語っていました。避難所での生活は辛いこともたくさんありましたが、それ以上に感動させられることもたくさんありました。せまいスペースのなかで見知らぬ者同士が場所を譲り合っていたこと、自分の家が潰れてしまって大変だというのに炊き出しに参加する人がいたこと、次にトイレを使う人のためにバケツリレーで水を運ぶという思いやりあふれる行動…どれもが印象的でした。そして電気が復旧してTVがついたとき、ほんのすこし日常が戻った気がして何とも言えない安心感を覚えたことを思い出します。

（出典）人と防災未来センターホームページ「震災を語る（第9回）」から抜粋

テント生活中に目の当たりにした人間模様

私たちが避難していた公園には、名古屋からきてくださった自衛隊によって大きな17張りのテントが設営されました。テントの床にはブロックを置き、その上に畳をのせました。床が高くなった分、余震が遠く感じるような気がしました。しかし非常に寒く、朝は布団の上に霜がおりることも。公園という子どもの遊び場を占領していましたので、公園の外回りの掃除と水やり、雨上がりのあとにできたくぼみの土埋め、缶やゴミ拾いなどを家族で行い、いつでも返せるように努めていました。この公園は「指定避難所」には認定されていなかったため、行政からの支援はありませんでした。指定の場所以外は、面倒をみてくれないんですね。皆さんも避難されるようなことがあったら、このことをぜひ思い出してください。こうした生活のなか、本当に色々な人間模様を目の当たりにしてきました。人間の良い面と悪い面の両方を見てしまったんですね。たとえば、用意された公衆電話に長蛇の列ができていますが、10円玉で1回電話をかけたなら列の最後尾に並び直す、こうした思いやりのルールが自然と生まれたことなどは嬉しいことでした。ご近所で倒壊を免れたお宅では「水出ます。裏に回ってください」「トイレ使用してください」という張り紙も。同じ被災者であるのにこうして声をかけてくださることが、本当にありがたかったです。その一方で、届けられた善意の物資を独占したり、厚かましく一番先頭に割り込んだりする最悪な方もおられました。この年になって、こんな対照的な人間の表と裏を知ることになるとは思いもしませんでしたね。

（出典）人と防災未来センターホームページ「震災を語る（第17回）」から抜粋

※URLは、<http://www.dri.ne.jp/shiryo/katari.html>

被災者の体験を聞く（阪神・淡路大震災）

日頃の経験が活きたのか、チームワークで9人の救出に成功！

全壊したわが家から脱出したときは、まさに着の身着のままという状態。パジャマに裸足です。8割ほどの家屋が全壊という悲惨な状態に驚きながら公園に行くと、近所の人たちも集まってきていました。みんな、ご近所どうしの顔をよく知り合っていたので、どこの誰がいないのかをすぐに把握。まだ生き埋め状態の人がいるとわかると、家族を中心にグループをわけ、道具なんか何もない状態で救出活動にむかいました。家屋が密集していたため、家が倒れていても隙間はあるもの。倒れたタンスやがれきを素手で取り除きながら、腹ばいになってなかへと入っては「どこにおりますか？」と声をかけました。タンスなどの下敷きになって自力で動けない人が多く、わずかにみえていた足をつかんで、腹ばいのまま外へと引きずり出して救出しました。また別の家では、私の首に抱きついてもらい、そのまま後ずさりをするように引きずって助け出したこともありましたね。私のいた中学校では学期ごとに避難訓練をやっていましたが、その訓練経験がどれほど活かされたかは、はっきりわかりません。でも、考えるより先に体が動いていたように思います。普段、指示を出す立場にいるせいか近所の人たちにも指示出しをしていて、気がつくともみんなの協力で家の下敷きになっていた人たち9人を助け出していました。

（出典）人と防災未来センターホームページ「震災を語る（第5回）」から抜粋

避難所は地獄のよう。公園にもどっての最初の夜

夕方になって避難所に行きましたが、避難できる状態ではありませんでした。体育館も教室も廊下も人・人・人。ケガ人やご遺体が次々運びこまれてきて、その地獄のような光景を見ただけで精神的に参ってしまい、元の公園に戻りました。崩れた家から家族が登山用のテントを引きずり出してきて張ってくれ、そこで寒さをしのぐことになりました。夜の10時頃になって大阪の友人が訪ねてきてくれました。私は、「会えて嬉しい！ありがとう」という思いでいっぱいになり、このとき初めて涙が出ました。昨日の夜から何も食べておらず、差し入れのおにぎりや温かな湯気と香りのお味噌汁は本当においしかったのですが、胃はびっくりして、せっかくの差し入れを受けつけてはくれませんでした。相変わらず地面の奥から響くような余震が続き、不安な夜を過ごしました。

（出典）人と防災未来センターホームページ「震災を語る（第17回）」から抜粋

※URLは、<http://www.dri.ne.jp/shiryo/katari.html>

被災者の体験を聞く（津波体験）

狂った海に次々にのまれた9人の釣り人

理性を失った海は、放たれてしまった矢のように、次々と釣り人をのみ込んでいく。橋まであと7~80メートルの地点まで逃げのびた人も、ついに足を濁流に掬われて転倒してしまった。津波が去って静寂が戻った時、釣り人の姿は一人としてそこにはなかった。寂寞とした砂浜だけが残った。

（青森県市浦村十三湖に被害調査に赴いていた役場職員）

（出典）秋田県つり連合会編，1983，『大津波に襲われた-釣り人が証言する日本海中部地震-』

死に神につかまり、岸壁をよじ登り助かる

押し流されてから、まず、足をばたつかせました。すると、長ぐつがそのまますっくと抜けたのです。「しめた」と思いました。足を動かしたら、水面に顔が出たのです。一呼吸ほどでした。再び水面の下になり、今度はどうしても浮かべないのです。これでは死ぬと思い、手の竿を離し、クーラーを水面下から手をのばしてつかまえ、やっとのことで顔を出すことができました。すると、目の前に海岸の崖が見えたのです。ほんの2メートルぐらいのところでした。

しかし、その2メートルの所へ向かって泳いでも泳いでも進まないのです。すでに引き波の始まるころだったからです。やっとのことで崖の岩につかまり、「もうはなすもんか」とつい声が出たくらいです。

（青森県深浦町椿山海岸で磯釣りをしていた人）

（出典）秋田県つり連合会編，1983，『大津波に襲われた-釣り人が証言する日本海中部地震-』

波間で娘とはぐれる。そして再会

私は高校生の娘と2人暮らしをしていたのですが、あの地震の瞬間は、2人ともそれぞれ2階の自分の部屋にいました。家ごと流されながら、水の中で私は娘をしっかり抱いていたのですが、娘が苦しいというのでちょっと腕の力をゆるめてしまったのです。そのとたんに、娘は、あつという間に消えてしまいました。（本人は砂浜に打ち上げられ助かる。娘も漁船に助けられる。）

娘とは函館の病院で再会しました。震災の翌日の夕方、たぶん4時から5時ごろだったと思います。声をかけることもできず、2人ともただただ抱き合いながら泣きました。

（青苗地区の女性）

（出典）奥尻町，1996，『北海道南西沖地震奥尻町記録書』

懐中電灯の光を目指して裏山をよじ登る

なにしろ海辺の町に暮らすのは初めてだったものですから、地震＝津波とか、その津波がどれほど恐ろしいものであるかというような認識はまったくありませんでした。（津波に襲われたが職員住宅の屋根の上に出られた）

メガネをなくしていたので、よくわからなかったのですが、そのとき、山のほうで懐中電灯のものらしい光が見えたんですね。あそこには人がいる。あそこまで行けば助かるのではないか。とっさにそう思い、屋根から飛び降りると、裏山に登りはじめました。

（奥尻に赴任したばかりの小学校教諭）

（出典）奥尻町，1996，『北海道南西沖地震奥尻町記録書』